

新祇園祭論

井 裕 薫

長年、女人禁制とされてきた祇園祭山鉾巡行への女性の参加が、南観音山とみなみかんのんやま函谷鉾かんこぼこにおいて2001年容認された。南観音山では数年前から女性囃子方はやしかたを巡行に参加させており、函谷鉾でも宵山までは参加させていたが、南観音山においては(財)祇園祭山鉾連合会から自粛勧告を受けてきた。そのため、山鉾連合会から正式に容認され、巡行に参加したのは2001年が初ということになる。これを受けて、この論文は今までの祇園祭論とは違う、女性囃子方に焦点をおいた祇園祭論を展開していく。

祇園祭は疾病退散のために貞観11年(869年)に始められた。応仁・文明の大乱のため30年ほど中断したが、現在も日本三大祭の一つとして続けられている。女性囃子方の参加が容認された南観音山は「下り観音山」ともいわれ、くだりかんのんやま楊柳観音像ようりゅうかんのんぞうと善財童子像を祀っており、毎年最後に巡行する。一方、函谷鉾は応仁の乱以前に起源を持ち、鉾の名は中国の戦国時代に齊の孟嘗君もうしょうくんが函谷関で、家来に鶏の鳴き声を真似させて関門を開かせ難をのがれたという故事にちなんでつけられている。また、戦後初めて女性を鉾に上げたことで民主鉾とも言われている。

今回、これらの鉾の女性参加が容認されたことは、長い間女人禁制を貫いてきた祇園祭には画期的なことなのだが、最近になって女性も参加していたという説が浮上した。それは、江戸初期(1615年頃)の作とされる「洛中洛外図屏風」を調査していた京都歴史博物資料館が巡行の鉾の上に女性が乗っている姿を確認したことによるのだが、女人禁制派ではこれを男性が女装して鉾に乗っ

ていた姿だと主張している。

女性参加派と女人禁制派のどちらが正しいかは屏風絵からは分からないが、いずれにせよ祇園祭は女性が参加できないものとされてきた。

では、そのために京都の女性は日常においても静かに暮らさなくてはいけなかったのかというと、そうではなく、明治の町屋の女性においては自分の考えに従って働き、伝統を守りながらも新しい文化を取り入れ、家風を創造的に継承していった。そうした姿勢が現在の女性囃子方へと引き継がれているように思われる。

女性囃子方には、自分の父親が南観音山や函谷鉾に所属していたことがきっかけで入会した人と、1996年に女性や財界関係者の呼びかけで発足した「平成女鉾」の清音会に所属する人に分かれる。南観音山と函谷鉾の女性囃子方は巡行参加を容認されたが、平成女鉾の女性囃子方は発足してから今に至るまで参加を認められていない。しかし、当時の副会長さんに平成女鉾についての質問にメールや電話で答えて頂いたり、囃子方の魅力や巡行参加の問題について女性囃子方20名にアンケートをとった結果、ほとんどの人が巡行参加を長い目で捉え、今出来ることを精一杯していこうという姿勢で取り組んでいることがわかった。また、参加を容認された南観音山と函谷鉾の女性囃子方の一人に、所属する保存会を通して電話で話を伺った時も、囃子方として10年近く経ってようやく容認されたことにはほとんど触れず、お囃子の楽しさについて話してくれたことがとても印象的だった。

こうしたことから、彼女たちは女人禁制の壁を気にすることよりも、お囃子を純粹に愛し、伝統を継承することに誇りを持つ気持ちが強いことがわかり、改めて伝統というのはそのままを維持するのではなく、新しいものを取り入れながら維持していくべきではないだろうかと思った。今回の南観音山と函谷鉾の女性囃子方容認をきっかけに、今まで祇園祭の女人禁制に関心がなかった人も関心を持ち、祇園祭を見に行き女人禁制について考える動きが増えれば、祭は変わるのではないだろうか。これからの動きに期待し、女性囃子方の人たちの思いが巡行で伝えられる日が来るように応援していきたいと思う。